

ゼカリヤ書1-2章 「エルサレムへの激しい愛」

1A エルサレムに帰られる主 1

1B 主への立ち返り 1-6

2B 谷底の赤い馬 7-17

1C 平穩の中の抑圧 7-12

2C 慰めの言葉 13-17

3B 四つの角と職人 18-21

2A 城壁のない町 2

1B エルサレムの測り縄 1-5

2B バビロンからの逃亡 6-13

本文

ゼカリヤ書を開いてください。私たちは、ハガイ書に引き続き、エルサレムに帰還した民が神殿を再建する時に、励ましと慰めの預言を行なったもう一つの預言を読んでいきます。再び、エズラ記 5章 1-2節を読んでみます。「さて、預言者ハガイとイドの子ゼカリヤの、ふたりの預言者は、ユダとエルサレムにいるユダヤ人に、彼らとともにおられるイスラエルの神の名によって預言した。そこで、シェアルティエルの子ゼルバベルと、エホツァダクの子ヨシュアは立ち上がり、エルサレムにある神の宮を建て始めた。神の預言者たちも彼らといっしょにいて、彼らを助けた。」住民からの反対運動を受け、工事をずっと中断させていた彼らですが、二人の預言によって立ち上がり、宮を建て始めました。

ハガイは、中断していた彼らに対して悔い改めを促し、そして悔い改めた彼らを励ますのが主な内容でしたが、ゼカリヤは工事を再開する彼らに、大いなる慰めを与える言葉となっています。私たちが主の働きをする時に、どうしても必要なのが希望に裏打ちされた慰めです。「預言する者は、徳を高め、勧めをなし、慰めを与えるために、人に向かって話します。(1コリント 14:3)」とパウロは言いました。私たちは希望によって救われているのですから、主はその希望を語りかけてくださいます。ゼカリヤという名前の意味は、「ヤハウエは覚えられる」という意味です。主が彼らを決して忘れることなく覚えておられ、またご自分の町エルサレムを覚えておられます。

ゼカリヤ書は、主に二つの部分、いや、細かく言えば三つの部分に分れます。初めは、1章から6章までの「幻」の部分です。彼は合計、八つの幻を見ます。次の区分は、7-8章です。神殿破壊を悲しむ断食をすればよいのかどうかを尋ねに来た者たちに、叱責と励ましの言葉を与えます。そして9章から14章が、言葉による預言です。ここには、主がエルサレムのために戻ってきてくださる約束がふんだんに書かれています。それは、主がこれから戻ってきてくださる再臨の約束です

が、それだけではなく、初めに来られた初臨についての約束もきわだっています。メシヤ預言、キリストについての預言が数多くあります。

ゼカリヤ書は、あまり注目されない書物ですが、私は、神がエルサレムを愛しているその感情が大きく表現されている預言なので、いつも励まされ、慰められ、大いにわくわくします。黙示的、象徴的な預言になっています。ちょうどダニエル書や黙示録に匹敵する、何かを指し示す象徴的な表現がとても多いです。そのため、ざっと読んでも理解が難解かもしれません。ダニエル書の時のように、じっくり、ゆっくりと進んでいきたいと思います。

1A エルサレムに帰られる主 1

1B 主への立ち返り 1-6

1:1 ダリオスの第二年の第八の月に、イドの子ベレクヤの子、預言者ゼカリヤに、次のような主のことばがあった。

時は、紀元前 520 年の冬にさしかかっています。10 月から 11 月にかけてであります。ハガイの預言のことを思い出してください。彼は、ペルシヤのダリオス王第二年の第六月一日に預言を行ないました。520 年 8 月 29 日です。それで総督ゼルバベルと大祭司ヨシュア、その他の民が主を恐れて、主に聞き従い、同じ月の 24 日に工事を再開しました。それから、第二回目の預言を同年の第七月の第二十一日に行なっています。520 年 10 月 17 日のことです。ソロモンの神殿を思い出して、嘆き悲しんでいる老人たちに、その栄光よりはるかにすぐれた栄光があることを教えました。そして第三回目は、この日から主の祝福が始まるとして、工事にとりかかった三か月後、第九月の二十四日に預言をしています。それが同年の 12 月 18 日です。ゼカリヤの預言の始まりは、ハガイの第二回と第三回の預言の間に、行なっています。第二回が第七月、第三回が第九月ですが、ゼカリヤはここにあるように第八月に語っているからです。ですから、彼らが工事を再開させるにあたって、二人の預言者から強い励ましと勧めを受けていたのです。

ゼカリヤは、「イドの子ベレクヤの子」との紹介があります。ネヘミヤ記 12 章に、帰還した祭司一族の名前が列挙されており、「イド族ではゼカリヤ(12:16)」との名前があります。つまり、彼は祭司の子です。祭司でかつ預言者と言えば、エレミヤがそうでしたし、エゼキエルもそうでした。また、バプテスマのヨハネも、祭司ザカリヤの子として生まれましたね。神殿や聖所について、また律法の教えについて、主に仕える務めを担っている人々です。幻には、祭司の子らしい反応を見ることが出来ます(3:5 等)。そして、若者でした。2 章 4 節で御使いがゼデキヤのことを「あの若者に」と言っています。エレミヤも若者だったのに、主に召されて預言を語りました。教会の指導者でも、テモテやテトスは若者でした。私も、若者から主の言葉を語り継ぐ人々が起こされることを願ってやみません。

1:2 主はあなたがたの先祖たちを激しく怒られた。1:3 あなたは、彼らに言え。万軍の主はこう仰せられる。わたしに帰れ。・・万軍の主の御告げ。・・そうすれば、わたしもあなたがたに帰る、と万軍の主は仰せられる。

エルサレムに帰還した民が決して忘れてはいけなかったのが、「主はあなたがたの先祖たちを激しく怒られた。」ということです。主が、先祖たちの背きの罪のゆえにエルサレムが破壊され、捕囚と民となったことを忘れて、同じことを繰り返しては決していけません。いかにこの罪が悲惨をもたらすのか、そこに再び戻ってはならないという、神の愛の言葉です。私たちキリスト者であれば、「私たちは罪に対して死んだ者だ。キリストが死なれた時に、私たちの古い人も十字架で死んだのだ。その信仰を忘れてはならない。」ということです(ローマ6章)。

そして主は、彼らが立ち帰るのであれば、主が帰って来てくださると約束されます。悔い改めの、また別の言い方です。愛する主の懷に私たちが再び戻るということです。主は私たちの自由意志を重んじられます。私たちが主を捨てるのであれば、主は無理強いして私たちを引き寄せることはできません。放蕩息子が、自分で我に返って、悔い改めて父の元に帰ったように、私たちも自分の意志を使って、主のもとに帰ります。主は、いつまでも変わらない方です。主が遠ざかるのではないのです、私たちが遠ざかっているだけです。ヤコブ書にも似たような勧めがあります。「神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。(ヤコブ 4:8)」

1:4 あなたがたの先祖たちのようであってはならない。先の預言者たちが彼らに叫んで、「万軍の主はこう仰せられる。あなたがたの悪の道から立ち返り、あなたがたの悪いわざを悔い改めよ。」と言ったのに、彼らはわたしに聞き従わず、わたしに耳を傾けもしなかった。・・主の御告げ。・・1:5 あなたがたの先祖たちは今、どこにいるのか。預言者たちは永遠に生きているだろうか。

これは興味深いです、先祖たちも預言者たちも既に死にました。けれども、その言葉も廃れてしまったのでしょうか？いいえ、その言葉はまだ生きており、同じことを行なうのであれば、同じことが起こるのだということです。「あの時代には厳しい裁きがあったが、それは昔の話だ。その時代に語られた言葉なのだ。」と昔のことに、警告の言葉を押し込めてしまっただけではありません。

1:6 しかし、わたしのしもべ、預言者たちにわたしが命じた、わたしのことばとおきてとは、あなたがたの先祖たちに追い迫ったではないか。そこで彼らは立ち返って言った。「万軍の主は、私たちの行ないとわざに応じて、私たちにしようと考えられたとおりを、私たちにされた。」と。

ここに、実は希望があります。エルサレムに帰還した民は、今、ペルシヤの支配の中に生きていて、確かに帰還したがかつてのように独立していないこと、まだその災いの中にいることを告白しているからです。ネヘミヤ記 9 章に、帰還した民が、先祖たちが主に立ち返らなかったことの告白

した祈りがあります。そしてこう言っています。「9:36-37 ご覧ください。私たちは今、奴隷です。あなたが私たちの先祖に与えて、その実りと、その良い物を食べるようにされたこの地で、ご覧ください、私たちは奴隷です。私たちが罪を犯したので、あなたは私たちの上に王たちを立てられました。その王たちのために、この地は多くの収穫を与えています。彼らは私たちのからだ、私たちの家畜を思いどおりに支配しております。それで私たちは非常な苦しみの中におります。」ペルシヤの王の憐れみによって、かろうじて帰還できましたが、それでも自由にされている訳では全然ありません。ペルシヤの王から重税が課せられています。多くの収穫があっても、多くが取られます。そして彼らは、確かにこの災いは、主から来ていることを知っているのです。しかし、ここが大事で、もし主が災いを下したのであれば、希望があるのです。午前礼拝で学びましたが、主がこの災いの中にあっても、それでも何か良いものを生み出すことができると期待できるからです。

2B 谷底の赤い馬 7-17

そして次から、八つの幻が始まります。彼らがこのような、低くされ、抑圧されている状況を初めに、谷底として神はゼカリヤにお見せになります。

1C 平穏の中の抑圧 7-12

1:7 ダリヨスの第二年のシェバテの月である第十一の月の二十四日に、イドの子ベレクヤの子、預言者ゼカリヤに、次のような主のことばがあった。

時は、初めの預言から三か月後であります。太陽暦では519年2月15日です。ゼカリヤは、夜にこの幻を見ています。そしてなんと、6章まで続く八つの幻をこの夜に、一夜で見たようです。これは、ゼカリヤにはかなりしんどい啓示だったでしょう。ダニエルは、終わりの日の幻を見た時に、病になったほどでした。しかし、ゼカリヤの場合は慰めの幻でありますから、その疲れはダニエルのようなものではなかったかもしれません。

1:8 夜、私が見ると、なんと、ひとりの人が赤い馬に乗っていた。その人は谷底にあるミルトスの木の上に立っていた。彼のうしろに、赤や、栗毛や、白い馬がいた。1:9 私が、「主よ。これらは何ですか。」と尋ねると、私と話していた御使いが、「これらが何か、あなたに示そう。」と私に言った。1:10 ミルトスの木の上に立っていた人が答えて言った。「これらは、地を巡るために主が遣わされたものだ。」1:11 すると、これらは、ミルトスの木の上に立っている主の使いに答えて言った。「私たちは地を巡りましたが、まさに、全地は安らかで、穏やかでした。」1:12 主の使いは答えて言った。「万軍の主よ。いつまで、あなたはエルサレムとユダの町々に、あわれみを施されないのですか。あなたがのろって、七十年になります。」

ゼカリヤは、かつてのダニエルと同じく、複数の御使いが活発に動いている中で、幻を受けています。彼が初めに見た幻は、その中心は、「ひとりの人が赤い馬に乗っていた」ということです。そ

の後ろに、赤、栗毛、そして白い馬に乗っている者たちがいます。これらは、御使いです。

そのひとりの人、赤い馬に乗っている人は、「谷底にあるミルトスの木の間」に立っています。谷底とは何を意味しているのか？山と山の間にある谷であり、それらの山々が力や権威を表しています。続けて読んでいくと、それが諸国の民であることが分かります。ユダとエルサレムを踏みつぶし、散らした国々であります。彼らは今、ペルシヤの下にいますが、そこでも抑圧されています。そして周囲の民がいます。彼らからも圧力を受けています。頭をまっすぐに上げて生きることができない状態です。それが谷底なのです。思い出してください、エゼキエル書 38 章に、ひどく干からびた骨が「谷間」(2 節)に非常に多くあったというところです。これと同じ意味を持っています。イスラエルの民が、諸国の民の中で希望を失い、干からびてしまっていたのです。命を失っていたのです。そこから、御霊によって彼らが生きた者となり、強い集団となります。



そして「ミルトスの木」が生えています。谷間には、しばしば、水が流れています。ミルトスは、そのような深いところで水が流れているところに生えている、低木です。「銀梅花」とも呼ばれます。見栄えもよくなく、建築材としても使えません。謙遜さ、慎ましさの象徴でもあります。ネヘミヤ記では、仮庵を作る時に用いられました(8:15)。ですから、ここの谷底の幻にはふさわしい木でしょう。ちなみに、オリブ山に主が再臨される幻が 14 章に出てきますが、そして神殿を主が建ててくださるのですが、神殿の丘とオリブの山の間には、ケデロン谷と呼ばれる谷があります。そこにも、ミルトスが生えています。

ゼカリヤには、彼が直接話している御使いが、別にいました。ゼカリヤが彼に、これらの馬が何なのか質問したら、御使いが、「見せてあげよう」と言いました。そして直接、赤い馬に乗った真ん中にいた方が、答えられます。彼の後ろにいた、三つの馬は地上を巡るために、主によって遣わされた者たちでした。馬ですが、これらは軍馬です。戦いのことを視野に入れて、巡察したのです。そして、「まさに、全地は安らかで、穏やかでした。」と報告しています。そしてその赤い馬に乗られた方が叫んだのです。「いつまで、あなたはエルサレムとユダの町々に、あわれみを施されないのですか。」と。12 節には、主の使いと言い換えられています。そうです、この方は旧約聖書では、しばしば主なる神とは別なのですが、けれども主ご自身と一つともされている方です。ゼカリヤ書 3 章には、主の使いがはっきりと、主ご自身と同一視されています。多くの聖書教師は、このような主の使いは、受肉前のキリストの現れだと言います。

主の使いが、周りが平穏であったという報告を受けて、「なぜ憐れんでくださらないのですか」と訴えているのです。そうです、これは真実な平和では全くないのです。ユダヤ人たちが押しつぶされている中で単に平穏が保たれていただけなのです。神を知らない者たちの安逸によって、神を

求めている者たちが抑圧されている状態です。この幻が初めにあって、終わりの幻、6章にある幻には、戦車を付けた馬が全地に出てゆき、彼らが国々に戦って、それで主の怒りが静められたことが書かれています。主が、ご自分の民が真っ直ぐに主を礼拝し、自由でいることができるために、立ち上がって戦ってくださるのです。主は、アブラハムの子孫が背を曲げられているような状態に対して、激しい憤りを抱いておられるのです。

主の使いは、「七十年になります」と言っていますが、これはエレミヤの預言を意識してのことです。「29:10-11 まことに、主はこう仰せられる。「バビロンに七十年の満ちるころ、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたにわたしの幸いな約束を果たして、あなたがたをこの所に帰らせる。わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。…主の御告げ。…それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」幸いな約束が、七十年後に果たされます。平安を与える計画、将来と希望を与えるためのものです。ところが、エルサレムに帰還しているのに、そうなっていません。それで訴えているのです。

2C 慰めの言葉 13-17

1:13 すると主は、私と話していた御使いに、良いことば、慰めのことばで答えられた。

主が、そばにいた御使いを通して語られました。「良いことば、慰めのことば」とあります。この良いは、ヘブル語でトブ、主が天地を造られた時に、「よしとされた」と言われた時の言葉、主のご性質の中心的部分です。主は善であられ、主は良い方であられ、そして幸いな言葉を持っておられます。

1:14 私と話していた御使いは私に言った。「叫んで言え。万軍の主はこう仰せられる。『わたしは、エルサレムとシオンを、ねたむほど激しく愛した。1:15 しかし、安逸をむさぼっている諸国の民に対しては大いに怒る。わたしが少ししか怒らないでいると、彼らはほしいままに悪事を行なった。』

ここが、ゼカリヤの預言における中心的な主題です。主が、妬むほどエルサレムを愛されたということ。午前礼拝の説教を思い出してください。諸国の民が「安逸をむさぼっている」とありますが、その安逸はユダの民への虐げによって成り立っていたものです。

そして、主は少ししか怒らないでいたけれども、彼らは欲しいままに悪事を行なわれたと言われます。これはどういうことでしょうか？アッシリヤやバビロンを、主はご自分の器として用いられました。イスラエルとユダを裁くために、ご自分の民を打ち、捕え移すために用いられました。しかし、当人たちは、そこで主を恐れることなく、器にしか過ぎなかったのに、我々が自分たちの力でユダヤ人を押しつぶしたのだとうぬぼれ、高ぶっていたのです。主がお許しにならなければ、彼ら是指一本もイスラエルに触れることはできませんでした。しかし、それとは知らずに、自分たちを誇り、

自分こそが神であるかのように奢り高ぶりました。私たち人間は、自分の思いのままにいったように見えると、自分たちの力でそれができたと高ぶるのです。

エレミヤ書 50 章には、バビロンに対する裁きの中に、彼らの言葉が書いてあります。「50:7 彼らを見つける者はみな彼らを食らい、敵は『私たちには罪がない。彼らが、正しい牧場である主、彼らの先祖の望みであった主に、罪を犯したためだ。』と言った。」バビロンが主の器として用いられることを、エレミヤの預言で聞いていた彼らは、自分がユダヤ人に対して行なう全ての酷い仕打ちを、これらは彼らが主に罪を犯したためだと言って、正当化した言葉なのです。主は、悪をも用いられ、正しい裁きを行なわれます。しかし、それはその悪を正当化することではありません。むしろ、主はその悪は悪で、はっきりとお裁きになるのです。

1:16 それゆえ、主はこう仰せられる。『わたしは、あわれみをもってエルサレムに帰る。そこにわたしの宮が建て直される。・・万軍の主の御告げ。・・測りなわはエルサレムの上に張られる。』
1:17 もう一度叫んで言え。万軍の主はこう仰せられる。『わたしの町々には、再び良いものが散り乱れる。主は、再びシオンを慰め、エルサレムを再び選ぶ。』

主の憐れみの言葉です。主の、云わば腸から出てくるような、深い憐れみです。「エルサレムに帰る」と言われていますが、かつてエルサレムから主の栄光が去ったことが、エゼキエル書 11 章に書いてありました。神殿からケルビムが出て行って、東の門をくぐって、外に出て、オリーブ山に留まりましたが、そこからもいなくなりました。イエス様が、オリーブ山からエルサレムに入城されましたが、その時も十字架につけられ、甦えられてから、オリーブ山に行き、天に昇られました。しかし、主の栄光が戻って来る時がきます。主が帰ってきてくださいます。エゼキエル 43 章に、「43:4-5 主の栄光が東向きの門を通過して宮にはいつて来た。霊は私を引き上げ、私を内庭に連れて行った。なんと、主の栄光は神殿に満ちていた。」とあります。

そして、主が「宮」を建て直してくださいます。これは終わりの日の幻ですが、けれどもゼルバベルはこの言葉を聞いて励まされたことでしょう、事実彼らは、3 年後、516 年に神殿再建を完成させます。実に、神殿が破壊された 586 年から 70 年後に完成されました。けれども、それはエゼキエルの見た神殿の幻とは違いました。主が再臨されて、エルサレムに宮を建ててくださることによって実現します。それでも、その終わりの幻があったからこそ、目の前にある神殿の再建が神の御霊によってできたのです。

それから「測りなわはエルサレムの上に張られる。」とあります。神だけでなく、エルサレムの町そのものが再建されます。ネヘミヤが指導して、後に城壁の再建も完成しました。測り縄とは、その測ったところに所有があること、また外敵から守られることを意味します。エレミヤ書 31 章 38-40 節に具体的に、測り縄によって町が測られ、そこが主に対する聖なるものとなることが預言され

ています。そして、エゼキエルの神殿の幻にも、40 章以降に測り縄を持っている者がいました。そして黙示録 21 章に、新しいエルサレム、天のエルサレムも測り縄で寸法が測られています。

そしてもう一度叫んでいます。ユダの町々に、「再び良いものが散り乱れる」とのことです。まるで桜の花が散り乱れているような表現ですね、良いもの、主のものが散り乱れるのです。それからシオンを慰め、エルサレムを再び選ぶとの言葉があります。「選ぶ」という言葉は、ゼカリヤ書に何度も出てきます。これは神の憐れみによって愛され、神のものとなったことを示す言葉です。キリスト者が、その愛の対象です。「2テサロニケ 2:13 主に愛されている兄弟たち。神は、御霊による聖めと、真理による信仰によって、あなたがたを、初めから救いにお選びになったからです。」

3B 四つの角と職人 18-21

1:18 私が目を上げて見ると、なんと、四つの角があった。1:19 私が、私と話していた御使いに、「これらは何ですか。」と尋ねると、彼は私に言った。「これらは、ユダとイスラエルとエルサレムとを散らした角だ。」1:20 そのとき、主は四人の職人を私に見せてくださった。1:21 私が、「この者たちは、何をしに来たのですか。」と尋ねると、主はこう仰せられた。「これらはユダを散らして、だれにも頭をもたげさせなかった角だ。この者たちは、これらの角を恐れさせ、また、ユダの地を散らそうと角をもたげる国々の角を打ち滅ぼすためにやって来たのだ。」

ゼカリヤは、谷間の幻を見た後に、どのくらいの時間があつたのでしょうか、第二の幻を見ました。「四つの角」です。再び、自分と話してくれる御使いにこれが何なのかを尋ねます。すると、「ユダとイスラエルとエルサレムとを散らした角だ。」とのこと。そうです、続けて主は、ご自分の妬むほどの激しい愛、イスラエルとユダを散らしている勢力に対する怒りを現わしておられるのです。角は、力や権威を示します。ダニエル書で私たちは、それが何かを知っています。バビロン、ペルシヤ、ギリシヤ、そしてローマです。

ところが、四つの角に引き続いて、「四人の職人」が来ました。職人が角を削り落としていくのですが、ユダの地を散らそうと頭をもたげる角を打ち滅ぼすための存在です。けれども複雑なのが、その職人もまた、21 節によると「角」なのです。どういうことなのか、主は、一つの国を角にもし、職人にもしておられるのです。バビロンを削り落としたのは、ペルシヤです。そのペルシヤも高ぶり、角として横暴にふるまいましたが、ギリシヤという職人にとって削り落とされました。そしてそのギリシヤも高ぶり角となり、今度はローマが職人となり、削り落としました。けれども、ローマから角が生えます、ダニエル書によれば十本もの角が生え、その間から一本の角が出て、大きなことを語る口が与えられます。しかし、職人がやって来ます。そう私たちの主イエス・キリストです。この方が、復興ローマを削り落とす職人であり、また救いの角であられるのです。

ですから、主は先にお語りになったように、ユダの民に怒られて、諸国の民を用いられましたが、

しかし彼らが自分の力を自由に使うことができたがゆえに、高ぶりました。それでまた別の国によって、その角を削り落とすというを行なわれて、この方のみが神である、この方こそがまことの主権者であり、支配者であることを示しておられたのです。

2A 城壁のない町 2

1B エルサレムの測り縄 1-5

2:1 私が目を上げて見ると、なんと、ひとりの方がいて、その手に一本の測り縄があった。2:2 私がその人に、「あなたはどこへ行かれるのですか。」と尋ねると、彼は答えた。「エルサレムを測りに行く。その幅と長さがどれほどあるかを見るために。」2:3 私と話していた御使いが出て行くと、すぐ、もうひとりの御使いが、彼に会うために出て行った。2:4 そして彼に言った。「走って行って、あの若者にこう告げなさい。『エルサレムは、その中の多くの人と家畜のため、城壁のない町とされよう。2:5 しかし、わたしが、それを取り巻く火の城壁となる。…主の御告げ。…わたしがその中の栄光となる。』」

次の第三の幻は、「エルサレムを測る、測り縄」です。先に、主が約束してくださったことがここに現れています。その幅や長さを測ることによって、ここが所有のところなのだという守りの境界線が与えられます。主は、守りの境界線を作っておられます。ヨブのことを、サタンが主に告発した時に、「1:10 あなたは彼と、その家とそのすべての持ち物との回りに、垣を巡らしたではありませんか。あなたが彼の手のわざを祝福されたので、彼の家畜は地にふえ広がっています。」と言いました。ヨブの回りに主は垣を巡らしておられましたが、私たちにも巡らせておられます。ですから、罪を犯して悔い改めない者が教会にいる時に、使徒パウロは、サタンに引き渡したと言いました(1コリント 5:5)。

御使いが測りに行こうとすると、他の御使いが出てきました。そして、そこには「城壁がない」ことをあの若者、ゼカリヤに告げなさいというのです。これは、聞いていたゼルバベルやユダヤ人にとって、あまりにも驚くべきことだったでしょう。今、彼らは城壁を持っていませんでした。そのため、いつも危険にさらされ、エルサレムの中では住むことができなかつたに違いありません。そして、いつもそしりを受けていました。それなのに、城壁のない町になると言われたのです。けれども、物理的な城壁ではなく、主の火が城壁となるというのです。これぞ、「主のファイアー・ウォール」です！思い出すのは、エリシャの見た幻です。アラム軍が彼の家を包囲しましたが、若者がそれを見て、自分たちが包囲されたことを嘆きました。けれどもエリシャは、彼の目が見えるようにと祈ったら、若者は、なんと「火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちていた。(2列王 6:17)」とあります。主は、たとえ敵がエルサレムを取り囲んだとしても、主ご自身がそれらの敵を火で滅ぼすよにしてくださるのです。地上の御国において、千年間の終わりに天の四方から大勢の軍隊が、聖徒たちの陣営とその愛された都を取り囲んだとありますが、それを天からの火で焼き尽くした、とあります(黙示 20:9)。ゼカリヤ書 8 章には、エルサレムが、老いた男女がおり、広場で遊ぶ子

たちでいっぱいになっていると預言されています(4-5 節)。このように、主が火の壁で、エルサレムを守っておられるのです。

そして、なぜ城壁がないのかの、理由が書かれています。「その中の多くの人と家畜のため」にあります。あまりにも、たくさんの人が集うので、城壁を建てると入り切れなくなるのです。「イザヤ 49:19-20 必ず、あなたの廃墟と荒れ跡と滅びた地は、いまに、人が住むには狭すぎるようになり、あなたを滅ぼした者たちは遠くへ離れ去る。あなたが子を失って後に生まれた子らが、再びあなたの耳に言おう。『この場所は、私には狭すぎる。私が住めるように、場所をあけてもらいたい。』と。」家畜もいっぱいになります。「イザヤ 30:23-24 主は、あなたが畑に蒔く種に雨を降らせ、その土地の産する食物は豊かで滋養がある。その日、あなたの家畜の群れは、広々とした牧場で草をはみ、畑を耕す牛やろばは、シャベルや熊手でふるい分けられた味の良いまぐさを食べる。」

そして、そこには主の火があって、「わたしがその中の栄光となる。」と言われます。かつて、主は荒野の旅をしていたイスラエルの宿営を火の柱で守り、かつご自分の栄光を示していました。それと同じようにエルサレムにもして下さるのです。「イザヤ 4:5-6 主は、シオンの山のすべての場所とその会合の上に、昼は雲、夜は煙と燃える火の輝きを創造される。それはすべての栄光の上に、おおいとなり、仮庵となり、昼は暑さを避ける陰となり、あらしと雨を防ぐ避け所と隠れ家になるからだ。」

2B バビロンからの逃亡 6-13

2:6 さあ、さあ。北の国から逃げよ。主の御告げ。天の四方の風のように、わたしがあなたを散らしたからだ。主の御告げ。2:7 さあ、シオンにのがれよ。バビロンの娘とともに住む者よ。

主ご自身が火となり、栄光を示して下さるエルサレムに対して、安逸の都バビロンとの比較が行われます。エルサレムは今、危険であり困難であり、けれども、ペルシヤに取って替わったバビロンの地は、大きく栄えても安定しています。けれども、どちらが危険なのか？倒壊するのは、バビロンであり、建て直され、豊かになり、守られるのはエルサレムなのです。エルサレムに帰還した民は、わずか五万人です。大勢のユダヤ人が未だ、ペルシヤのその地域に住んでいました。確かに、エレミヤを通して、捕囚の生活ではきちんと家を立て、商売をし、その町の繁栄のために祈れと命じられていました(25:9-7)。ですから、彼らはその生活に定着してしまい、神の、帰還せよという命令に従っていなかったのです。しかし、正反対の定めがあるのだということです。

ここで、「北の国から逃げよ」と言われていますが、エルサレムからバビロンは東の方角です。けれども、アラビア半島がその真ん中にあります。ですから、いつもバビロン、アッシリヤなどメソポタミアの地域から来る時は、ユーフラテス川沿いに北西に動き、それからその上流で、シリアか

らイスラエルに南下します。ですから、バビロンはエルサレムにとって北の国です。そして、大事な言葉があります。「天の四方の風のように、わたしがあなたがたを散らしたからだ。」であります。主が天の四方に、彼らをエルサレムから散らしました。主がそのようにされたのです。主が、災いを起こしたのであれば、希望があります。主が、彼らがエルサレムに帰るようにさせることも、可能なのです。

それから、「シオンにのがれよ。バビロンの娘とともに住む者よ。」と呼びかけておられます。バビロンは逃れないといけなところ、そして逃げる先はシオンです。キリスト者であれば、世は分離すべきところ、そして逃げるべきは主のところ。「2コリント 6:16-18 彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。」

エレミヤも、そしてヨハネも黙示録で、それぞれがバビロンから逃れよという呼びかけを、主の言葉として行なっています(エレミヤ 51:6、黙示 18:4)。ですから、ここはユダの民だけに語りかけられたものではなく、神の民全般に対して語られていることです。世の愛は、神の愛と相容れません。神の愛があれば世を愛してはならず、世を愛していればその人に神の愛はありません。そして世と世の欲は過ぎ去り、神の御心を行なう者だけがながらう、とヨハネは第一の手紙で話しています(1ヨハネ 2:15-17)。終わりの日には、黙示録 18 章によると、大淫婦バビロンが地上の王たちと不品行を行ない、商人たちとの貿易で莫大な富を得ていますが、それが瞬く間に崩壊することが預言されています。

2:8 主の栄光が、あなたがたを略奪した国々に私を遣わして後、万軍の主はこう仰せられる。『あなたがたに触れる者は、わたしのひとみに触れる者だ。2:9 見よ。わたしは、こぶしを彼らに振り上げる。彼らは自分に仕えた者たちのとりことなる。』と。このとき、あなたがたは、万軍の主が私を遣わされたことを知ろう。

主が、バビロンを倒壊させ、それからエルサレムを略奪する国々に、こぶしを振り上げるとあります。終わりの日、黙示録にはバビロンが倒壊しても、それで話は終わりではなく、世界の軍隊が神とキリストに対して戦っている場面があります。これをゼカリヤ書 12-14 章で見ますと、エルサレムに対して世界の軍隊が攻めて来ることが書かれています。バビロンから逃れて、エルサレムに入ってもそれでは、全て全滅ではないか？という危機を覚えることでしょう。ちょうど、エジプトから出たのに、紅海の前でエジプト軍に追われたような感じです。ユダヤ人の歴史でも、せつかくホロコーストを免れてイスラエルの地に帰還したのに、そこに待ち構えていたのはそこに住んでいるアラブ人からの攻撃だった、というようなものです。しかし、主はこれらの国々に戦い、倒されます。

そして主は、「あなたがたに触れる者は、わたしのひとみに触れる者だ」と言われました。瞳、あるいは瞳孔は体の中で最も敏感な所の一つです。少しでも障害物がそこに触れれば、全身を使ってそれを守ろうとします。イスラエルの民がわたしにとって、そのようなものだ、と主は言われます。主は、荒野の旅をしたイスラエルの民について、「申命 32:10 主は荒野で、獣のほえる荒地で彼を見つけ、これをいだき、世話をして、ご自分のひとみのように、これを守られた。」と言われました。主はアブラハムを呪うなら、自分に呪いを招くと言われました(創世 12:3)。主は、キリスト者のご自身についても、同じようにご自身と私たちを一体化させます。パウロが、まだ回心する前に、キリスト者を迫害していた時に、「なぜ、わたしを迫害するのか?」と言われました。迫害をしていたのは、キリストの弟子たちです。けれども、彼らを迫害すれば、それはイエスご自身を迫害しているのと同じだったのです。

そして、「彼らは自分に仕えた者たちのとりことなる。」と言われます。逆転します、弱くされている者、圧迫されている者たちが、かえって圧迫している者たちを従えさせるようになります。イスラエルの民は、御国に入る時に、そのようにされます。「イザヤ 14:1-2 まことに、主はヤコブをあわれみ、再びイスラエルを選び、彼らを自分たちの土地にいこわせる。在留異国人も彼らに連なり、ヤコブの家に加わる。国々の民は彼らを迎え、彼らの所に導き入れる。イスラエルの家は主の土地でこの異国人を奴隷、女奴隷として所有し、自分たちをとりこにした者をとりこにし、自分たちをしいたげた者を支配するようになる。」イエス様が語られた御国の宣言もそうでしたね、へりくだる者が地を受け継ぎます。主は必ず、低くしている者たちと共におられて、ご自身の力強さと栄光を現わし、高ぶっている者についてはそれを低くします。

興味深いのは、「あなたがたは、万軍の主が私を遣わされた」と言っていることです。ここの「私」とは誰か? 主の栄光が、私を遣わすと言っていますが、イエス様が再臨についてこう言われました。「マタイ 24:30 そのとき、人の子のしるしが天に現われます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。」主イエスが、神の輝かしい栄光を帯びて、遣わされてくるのです。この方が国々にこぶしを振り上げるのです。ゼカリヤ書 14 章、また黙示録 19 章で、国々の軍隊に戦われるイエス様の姿が出ます。

2:10 シオンの娘よ。喜び歌え。楽しめ。見よ。わたしは来て、あなたのただ中に住む。…主の御告げ。…2:11 その日、多くの国々が主につき、彼らはわたしの民となり、わたしはあなたのただ中に住む。あなたは、万軍の主が私をあなたに遣わされたことを知ろう。

主が再臨されて、神の国を建てられ、その時に主ご自身がエルサレムの神殿に着座されて、真ん中におられます。私たちは、ゼパニヤ書でそのことの大きい喜びを読みました。「ゼパニヤ 3:14-15 シオンの娘よ。喜び歌え。イスラエルよ。喜び叫べ。エルサレムの娘よ。心の底から、喜び勝ち誇れ。主はあなたへの宣告を取り除き、あなたの敵を追い払われた。イスラエルの王、主

は、あなたのただ中におられる。あなたはもう、わざわざを恐れない。」主が、私たちの真ん中におられるという喜びを、御霊によって、今も前味を味わっています。

そしてユダヤ人だけではなく、国々の民もイスラエルの神を自分の神とします。それゆえ、彼らもまた主の民となるのです。異邦人である私たちが、キリストにあって既に主の民となっています。これからも、連なることでしょう。そして、大患難の時代にもイエス様に連なる人々は出てきます。マタイ 25 章には、羊として選り分けられた人々は御国の中に入ります。自分たちだけでなく、多くの異邦人たちも自分のメシヤについて、この方を礼拝しているのです。その時に、ユダヤ人たちは確かに、イエスが神から遣わされた方、メシヤであることを知るのでした。

2:12 主は、聖なる地で、ユダに割り当て地を分け与え、エルサレムを再び選ばれる。」2:13 すべての肉なる者よ。主の前で静まれ。主が立ち上がって、その聖なる住まいから来られるからだ。

主が、エルサレムに帰って来られて、その只中に住まわれる時、そこは「聖なる地」と呼ばれます。それはエゼキエルの幻の中にもありました、最後の章 48 章で、神殿があり、その周りにレビ人が住み、そしてダビデの領地があり、そしてエルサレムもあります。そして、十二部族の割り当て地もありました。

そして主が、「すべての肉なる者よ。主の前で静まれ。」と言われます。人々は、騒いでいます。自分のことを行ない、騒いでいます。けれども、これだけのことをされる主の前で、誰もが自分の営みをとめるでしょう。そして主は、「主が立ち上がって、その聖なる住まいから来られるからだ」と言われます。この聖なる住まいとは、もちろん天のことです。天に、神の右に着座されている方がついに立ち上がり、戻って来られるのです。詩篇を読みます、110 篇です。

1 主は、私の主に仰せられる。「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、わたしの右の座に着いていよ。」2 主は、あなたの力強い杖をシオンから伸ばされる。「あなたの敵の真中で治めよ。」3 あなたの民は、あなたの戦いの日に、聖なる飾り物を着けて、夜明け前から喜んで仕える。あなたの若者は、あなたにとっては、朝露のようだ。4 主は誓い、そしてみこころを変えない。「あなたは、メルキゼデクの例にならい、とこしえに祭司である。」5 あなたの右にいます主は御怒りの日に、王たちを打ち砕かれる。6 主は国々の間をさばき、それらをしかばねで満たし、広い国を治めるかしらを打ち砕かれる。7 主は道のほとりの流れから水を飲まれよう。それゆえ、その頭を高く上げられる。

私たちは、ここの神の民と同じく、ただ主を喜び、ほめうたえ、仕えている身です。私たちが主を賛美し、喜んで仕えている中で、私たちのために戦ってくださいます。頭を高く上げてくださいます。